

## 『沈黙』 遠藤周作

### 【テーマ】

〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

### 【本】

『沈黙』 遠藤周作 (新潮文庫、1981)

初刊:『沈黙』1966年(昭和41年)3月、新潮社書き下ろし

### 【遠藤周作 (えんどう しゅうさく)】

1923年(大正12年)3月27日 - 1996年(平成8年)9月29日)。小説家。随筆や文芸評論や戯曲も手がけた。父親の仕事の都合で幼少時代を満洲で過ごした。帰国後の12歳の時に伯母の影響でカトリックの洗礼を受けた。慶應大学文学部仏文科を卒業後、1950年にフランスへ留学。帰国後は批評家として活動するが、1955年半ばに発表した小説「白い人」が芥川賞を受賞し、小説家として脚光を得た。第三の新人の一人。キリスト教を主題にした作品を多く執筆し、代表作に『海と毒薬』『沈黙』『侍』『深い河』などがある。1960年代初頭に大病を患い、その療養のため町田市玉川学園に転居してからは「狐狸庵山人(こりあんさんじん)」の雅号を名乗り、ぐうたらを軸にしたユーモアに富むエッセイも多く手掛けた。『沈黙』をはじめとする多くの作品は、欧米で翻訳され高い評価を受けた。グレアム・グリーンの熱烈な支持が知られ、ノーベル文学賞候補と目されたが、『沈黙』のテーマ・結論が選考委員の一部に嫌われ、『スキャンダル』がポルノ扱いされたことがダメ押しとなり、受賞を逃したと言われる。

### 【ストーリー】

17世紀の日本の史実・歴史文書に基づいて創作した歴史小説。江戸時代初期のキリシタン弾圧の渦中に置かれたポルトガル人の司祭を通じて、神と信仰の意義を命題に描いた。この小説で遠藤が到達した「弱者の神」「同伴者イエス」という考えは、その後の『死海のほとり』『侍』『深い河』といった小説で繰り返し描かれる主題となった。

島原の乱が収束して間もないころ、イエズス会の高名な神学者であるクリストヴァン・フェレイラが、布教に赴いた日本での苛酷な弾圧に屈して、棄教したという報せがローマにもたらされた。フェレイラの弟子セバスチャン・ロドリゴとフランシス・ガルペは日本に潜入すべくマカオに立寄り、そこで軟弱な日本人キチジローと出会う。キチジローの案内で五島列島に潜入したロドリゴは隠れキリシタンたちに歓迎されるが、やがて長崎奉行所に追われる身となる。幕府に処刑され、殉教する信者たちを前に、ガルペは思わず彼らの元に駆け寄って命を落とす。ロドリゴはひたすら神の奇跡と勝利を祈るが、神は「沈黙」を通すのみであった。逃亡するロドリゴはやがてキチジローの裏切りで密告され、捕らえられる。連行されるロドリゴの行列を、泣きながら必死で追いかけるキチジローの姿がそこにあった。

【推薦者からのコメント】 ※推薦者「アマザワさん」より

出会いは高校の国語の時間。  
それからかなりの年月が経ちましたが、この小説ほど、すごい小説にまだ出会えていません。  
現実の世界にはヒーローもドラえもんもなくて、救われないことも多い。  
この小説の主人公も救われない状況で悩み苦しみます。  
そこで彼が何を見つけるのか、一緒に追いかけてみましょう。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう ※推薦者「アマザワさん」より

1): この本を読んだ感想を教えてください。

- 『沈黙』読むのは今回で3〜4回目くらいです。「お気に入りの小説」を聞かれた時に挙げたことはないですが、私にしては珍しく何回も読み返しています。実は結構気に入っているのかもしれませんが。今回読んで一番気になったのは「神は何もしてくれない」と主人公のロドリゴが思う場面です。何もしてくれない → 何かしてくれると思ってる → 具体的な見返りを求めているということ? から始まって、そもそも信じるってどういうこと? と考えてしまいました。
- 30年振りに読み返した。アメリカにホームステイした先の家が牧師で、彼も「遠藤のファンだ」と言っていたのが懐かしく思い出したりした。遠藤独自のキリスト教解釈に衝撃を受けた。当時『沈黙』と同時期に『死海のほとり』を読んでいてその記憶が強かったが、今回改めて読むと『沈黙』における〈赦し〉の解釈に気づかされてうれしかった。
- はじめて読んだのが311の大災害の後だった。「神も仏もない」というような状況下だったので、本書の内容にすごくリンクしていたのをよく覚えている。個人的に長崎には縁があるので作品の舞台に思いを馳せたりした。キリスト教の伝来に個人的に強く興味を覚え、血が騒ぐ。マイベスト・ノベルといってもいい一冊。
- 高1のときに読んだ。当時は「キチジローだめな奴だなあ」と思ったが、今回再読してその弱さに共感できるようになっていたのが驚きだった。この変化はいったいなんだろうか?
- 誰の(誰にとっての)「沈黙」だったのかわからなかった。一気に読めた。大げさな言い方かもしれないが「崇高だな」と思った。キチジローとはいったい何者、何だったのか、気になる。
- 苦しみがある(多い、強い)方をわざわざ選ぶことがあるのだろうか。あるとしたらそれはいったいなぜ、どんな時なんだろうか。最後に踏み絵に足を載せるときのロドリゴにしても、自分に都合のいいような解釈をし、自分を無理やり納得させているようなところがないとは言い切れないのではないか。本当に苦痛を抱えているとき、それから逃れようとする(危険回避、安全希求)の意識が働くのは自然なことではないのか。単に良い話というだけでは読めない物語だと思う。
- 感情に流されて読んでしまっただけとはいけないと思う。安易にわかった気になってもいけないと思う。作品と現在の読者の間には何重もの壁がある。一つは時代的な隔たり。二つ目は一般的に宗教というものを理解するむずかしさ。三つめは宗教の中でも比較的身近で知っていると思いがちなキリスト教の特殊性。これらの隔たりを踏まえて本作をじっくり理解してみるときに浮かび上がってくるものとは何か。

2): この本を読んで共感した人物・場面はありましたか。どんなところに共感しましたか？

- 「表向き転ぶ(表向き周りに合わせる)」ことは大なり小なりあるし、あったなと思いました。
- 弱さや苦しみ、罪の後にこそ「救い」が示されるのが宗教ではないか。転びや裏切りという挫折があるからこそ、再度信仰に立ち返ったときには信心深くなるのではないか。キリスト教のユダのように信者の裡で信仰を一度徹底的に疑うこと、それを経ることで宗教への帰依が強化されるのではないか。
- 神の「沈黙」を感じている人の方が、なんとなく信仰を続けている人よりも、その宗教への希求度が高い可能性がある。
- ユダを裡に抱える者(=転び者)の信仰心と、殉教者の信仰心との間に差異はあるのか？ないのか？ あるとしたらその違いとは何だろうか。⇒「本物の信仰、普遍的な信仰」とは何か？  
フェレイラだって、生涯かけて真面目に信仰心を持ち、神について考えていたと言っているのではないか。
- ロドリゴとキチジローは似ている。
- ロドリゴとキチジローは似ているのではなく、(ほぼ)同じような存在なのでは？
- ロドリゴが好き。彼の持っている神のイメージが物語を通じて段々と変化している。しかもそれがどことなく日本人の宗教観に近いような、自然界にも神の御業を見出すようなものに接近しているように感じられた。
- 茶道を嗜んでいたが、純日本的な伝統文化と思われる茶道の中にもキリスト教文化が溶け合っている部分があることを知って、本作のようなイエス像の日本ナイズ(ローカラズ)についてもよく納得できる。

3): 物語の中で、キチジローは「じゃが俺にやあ俺の言い分があつと。踏絵ば踏んだ者には、踏んだ者の言い分があつと。踏絵をば俺が悦んで踏んだとでも思つとつと。踏んだこの足は痛か。痛かよオ。俺を弱か者に生れさせおきながら、強か者の真似ばせるとデウスさまは仰せ出せれる。それは無理無法と言うもんじゃい」(旧版 p146)、「一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切支丹としてハライソに参ったかも知れん」(旧版 p148)と言います。強さ・弱さとは何なのでしょう。それはどんな状況においても変わらないものでなければならぬのでしょうか。(※井上筑後守の巧妙な術策によって転んだロドリゴと、自らの弱さゆえに転んだキチジロー)

- 「一昔前に生れあわせていたなが…」と思ったり言うところはキチジローの弱さだと思います。でも、じゃあキチジローは強いのか弱いのか？と聞かれたら、私はどちらかよくわからなくなってしまいます。
- キチジローが宣教師を奉行所に売る点や勤労に対して怠惰な様子、酒浸りの点などは弱さそのものとも言える。一方で身体的苦痛や生命の恐怖などから、過酷な拷問の前に常に挫け「転びもん」になっているのは、一概に弱いとも言えない気がする。
- ロドリゴの心の裡にも、棄教をしたというフェレイラ神父の話に動揺してしまうような何か——つまり自分の信仰心への揺らぎが当初からあったのではないか。ロドリゴもまた、彼の内に棄教への恐れや迫害への恐怖を抱えていたのではないか。迫害や身体的・精神的苦痛に怯えない方がおかしい。
- 教父たちの中にも、ガルベのように殉教した(できた)ものからロドリゴのように転んだものまでいるし、信者の中にもモキチやイチゾウのように殉教した(できた)ものまで多様なケースがある。殉教できるというのは信仰への絶対的な帰依であるケースや、現生の貧しさとハライソでの復活とを天秤に量り、来世を“具体的な利益”としてとらえているからこそできることだったという側面もあるのでは？
- 読者のわれわれも知らず知らず、井上のように弱者を排除したり弾圧したりするようなことがあるのではないか。それもまたある種の「弱さ」から来るのではないか。

## 【解題】 『沈黙』という作品について

### 遠藤文学に描かれるキリスト教の特殊性

**0. 用語の問題：** 受容という用語は、かつて日本に於けるキリスト教の土着化の問題が論じられた時に、殊に明治期に於けるプロテスタンティズムの受容に関して使用された。武田清子氏の精緻な分析によると5つの型：埋没型、孤立型、対決型、接木型 あるいは土着型、背教型がある。しかし遠藤は何型になるのか。西欧的キリスト教を日本の精神的土壌に移そうと試みた(こう言う言い方がそもそも妥当かどうか)という点では、遠藤は一応は接木型ということになる。しかし彼の最近の作品における試みには、もはや日本に於けるキリスト教受容(変容)という次元では必ずしも捉えきれないものがある。

**1. 遠藤におけるカトリズム受容：母性原理としてのキリスト教：**「遠藤はフランスでヨーロッパのキリスト教が日本人の霊性(井上神父の言葉によれば求道性ぐどうせい)にじっくり来ないという不満を抱いた。遠藤の親友、井上洋治神父も遠藤と同じ疑問を感じて帰国した。遠藤は大病を境に日本人にじっくりする母性原理を「同伴者イエス」のなかに見いだす。

**2. 「沈黙」：三つの問題提起と日本人にもわかる「共に苦しむイエス像」：**『沈黙』には三つの問題提起がある：(1)汎神論的文化の日本の土壌に一神論のキリスト教は根づくか、(2)キリストはユダを許したもうたか、(3)キリスト教の神が愛の神なら何故、神は迫害された人間の叫びに沈黙されたままなのか。つまり『沈黙』の主題は強大な国家権力と弱者の当為の相剋という枠組のなかに遠藤の個人的なユダ論を展開させたものである。裏切り者のユダでさえ決して見捨てないイエス。『沈黙』は遠藤のユダ論だが、そのユダ論はイエス理解において西欧のそれとは自ずから異なる。「私にはイエスが無能力者で奇跡なんか行えなかった人、一緒に苦しもうとした人だというイメージがあるんです」と遠藤は語る。弱さを正当化するのではなく、ともに苦しむイエスこそ日本人のイエス像である。その限りにおいて氏の野心的な試みは成功したと言えよう。

(兼子盾夫；『遠藤周作における神の問題、『沈黙』と「深い河』』 湘南工科大学紀要、1996・3)

### 「切支丹屋敷役人日記」の意味するもの

(『切支丹屋敷役人日記』は)〈本篇〉において井上筑後守の巧妙な術策によって転んだロドリゴと、自らの弱さゆえに転んだキチジローのその後を、歴史的資料のなかからわざわざ浮かび上がってくる、実在の転び伴天連たちとその周辺に集まり生きる人たちの屋敷内での姿を投げ所として(語ろうとする)もので、こうした歴史的資料に投げかかることで、ロドリゴとキチジローの終わることのない信仰の闘いを暗示し、キリスト者としてのその後の(生きざま)にリアリティを与えようとしたといえよう。(池田純溢；『遠藤周作『沈黙』の研究 —「切支丹屋敷役人日記」・〈実〉と〈虚〉との間—』93・1、上智大学国文学論叢)

神は沈黙しているのではなく、「神の沈黙」に絶望した人間のその後の人生を通して語っているのではないか、という神の答えの暗示なのだ。『沈黙』の終わりに付された「切支丹屋敷役人日記」に記録されたロドリゴの三十年後の死がそれを示している。評者はしばしば、読者がこの部分を読み落としていることを指摘して、『沈黙』の主題の隠されていることを強調するが、たしかにこの結末を読み落として「神の沈黙」の真の意味は見えてこないというべきである。(武田友寿；『「沈黙」以後』85・6、女子パウロ会)

『切支丹屋敷役人日記』は、(略)ロドリゴが死ぬまでの生涯を描いている。つまり、ロドリゴ六十四歳。踏絵に足掛けてから四一年後にあたる。しかもロドリゴは『不食』により病死したのである。『不食』とは何か？ 『食わず』、すなわち『自分の意志による断食』『絶食』である。これはキリスト教の禁じている『自殺』と解してもいい。しかしなぜ『自殺』なのか？ 『切支丹屋敷役人日記』の記す転び後の生き方、中間吉次郎の役人に対する態度、それは殉教者の精神に匹敵する強い愛の実践である」(武田友寿：「遠藤周作」、『話題源 現代文--文学作品の舞台裏』91・5、東京法令出版)

### キチジローの〈弱さ〉

あの聖書の中で最も劇的な場面を心に逸らせました。基督が食卓でユダにむかって言われた「去れ'行きて汝のなすことをなせ」

私には——司祭になってからも——この言葉の真意がよく掴めなかったのです。この立ちのぼる水蒸気の中をキチジローと足を曳きずりながら、私はこの重要な聖句を自分に引きつけて考えていた。いかなる感情で基督は銀三十枚のために自分を売った男にまれという言葉を投稿つけたのだろうか。怒りと、憎しみのためか。それともこれは愛から出た言葉か。怒りならばその時、基督は世界のすべての人間の中からこの男の救いだけは除いてしまったということになる。基督の怒りの言葉をまともに受けたユダは永遠に救われることはないでしょう。そして主は一人の間を永遠の罪に落ちるままに放っておかれたということになります。(略)私の眼にはもし、冒瀆的な想像が許されるなら、ユダ自身がまるで基督の劇的な生涯と十字架上の死という栄光のために引きまわされた憐れな塊偏、操り人形のような気がするのです。(遠藤周作；『沈黙』1966)

『沈黙』において、ロドリゴが抱くキリスト像の変化は、〈父の宗教〉としてのキリスト教から〈母の宗教〉としてのキリスト教への変化を意味していることは周知のとおりである。しかし、この、〈キリスト像の変化〉が、ユダに対するキリストの心理をロドリゴが解いて行く過程と共に進められていることは注目に値するだろう。つまり、『沈黙』におけるロドリゴが抱くキリスト像という〈母の宗教〉は、〈キリスト劇〉におけるユダの存在を通して見出されているものであると言っても過言ではない。

(辛承姫；「遠藤周作の『沈黙』 --弱者の典型としてのキチジローの系譜」 2007・1)

遠藤の「弱者」は常に「ヒロイズム」との対置構造を持つ。それは武田が言うように遠藤が描く「弱者」が「エゴイズム」の産出である「ヒロイズムの剥奪」の役割を担っている故であろう。だが、この「エゴイズム」を他ならぬ「殉教」という「ヒロイズム」を掻き立てる「西洋の教会」そのものの姿として捉える時、この「弱者」による「ヒロイズムの剥奪」は「西洋の教会」への遠藤の「辛辣な批判」に転換されるのである。つまり、「弱者」に対置されているのは、「西洋の教会」、または遠藤において「西洋の教会」そのものを意味する「西洋」に他ならない。遠藤における「弱者」の問題は、この「西洋」との関りなしには論じられないものであろう。

このことは、何よりも『沈黙』において、「今まで誰もしなかった一番幸い愛の行為」の意味を担っていたロドリゴの背教が「教会の聖職者たち」に「裁かれるべき」、「追われるべき」行為として、まず、背教後のロドリゴの念頭に上っていることや、ロドリゴがその背教行為を通して獲得した「赦し」の神が、「聖職者たちが教会で教えている神」とは「別なもの」とされていることで端的に示されているのである。

(辛承姫；「遠藤周作の『沈黙』 --弱者の典型としてのキチジローの系譜」 2007・1)

## 遠藤周作の描くイエスの愛

だが「神の愛」とか「愛の神」を口で語るのはやさしいのだ。過酷な現実生きる人間は神の愛よりもはるかに神の冷たい沈黙しか感じぬ。過酷な現実から愛の神を信ずるよりは怒りの神、罰する神を考える方がたやすい。だから旧約のなかで時として神の愛が語られていても、人々の心には怖れの対象となる神のイメージが強かったのだ。心貧しき人や泣く人に現実では何の酬いがないように見える時、神の愛をどのようにしてつかめるといのか。(略)  
現実に生きる人間の眼には最も信じがたい神の愛を証明するためにイエスがどのように苦闘されたか——それがイエスの生涯をつらぬく縦糸なのである。(遠藤周作; 『イエスの生涯』1973)

「(神の) 僕の<sup>しもべ</sup>使命は、貧しい者、悲しむ者に福音を告げ、悲哀の人たちすべてを慰めることである」(イザヤ書、六十一ノ一～三)

幸いなるかな 心貧しき人 天国は彼等のものなればなり

幸いなるかな 柔和な人 彼等は地をうべければなり

幸いなるかな 泣く人 彼等は慰めらるべければなり

幸いなるかな 心きよき人 彼等は神を見奉るべければなり

(遠藤周作; 『イエスの生涯』1973)

ひよっとすると、ユダはこの時、こうした言葉でイエスに最後の忠告をしたのかもしれない。師よ、あなたは人間の永遠の同伴者となるため死のうとされている。しかし、人間は別のものを必要としているのです。ガリラヤでも癩病人たちは愛よりも治ることだけを、跛は歩けることだけを、盲人は眼の見えることだけを欲しがったではありませんか。人間とは結局、そんなものなのです。——それがユダのこの言葉の背後に含まれていたのかも知れぬ。

(遠藤周作; 『イエスの生涯』1973)

## 参考資料;

- ・『イエスの生涯』 遠藤周作 (新潮文庫、1982)
- ・『深い河』 遠藤周作(講談社文庫、1996)
- ・『こころの声を聴く—河合隼雄対話集』 河合隼雄 (新潮文庫、1997)
- ・「遠藤周作における神の問題、『沈黙』と『深い河』」 兼子盾夫(「湘南工科大学紀要」30(1),1996・3)
- ・「遠藤周作の『沈黙』 --弱者の典型としてのキチジローの系譜」 辛承姫(「専修国文」(80), 2007・1)
- ・「普遍と個別の相克 : 遠藤周作『沈黙』論」 李英和(「文学研究論集」(26),2008・1)
- ・「遠藤周作『沈黙』と「コンチリサン(痛悔)」 : 〈神の沈黙〉と〈人間の沈黙〉」 尾西康充(「人文論叢」(29),2012)
- ・「遠藤周作における「語り」の方法としての「象徴」と「暗喩」 : 『沈黙』の「白い光」と「キチジロー」を中心に」 兼子盾夫(「人間学紀要」(42), 2012)
- ・「遠藤周作『沈黙』論 : ロドリゴの救済」 岩崎里奈(「日本文芸研究」65(2), 2014・3)
- ・「『殉教者』を書き終えて」 加賀乙彦(「本」 2016・5)
- ・「『沈黙』 作中の長崎マップ」 アマザワさん

---

朝さろん 2016 年のスケジュール <http://salon-public.com/archives/category/033>

◇朝さろん#60: 6月12日(日) 9:00-12:00 / セリンジャー

『skmt 坂本龍一とは誰か』坂本龍一、後藤繁雄(ちくま文庫)

※本書は、『skmt』(リトル・モア社,1999)と、『skmt2』(NTT 出版,2006)を合本したものです

参加費:500 円(参加費)+1200 円程度(会場費+ワンドリンク)

場 所:渋谷の談話室(ご予約時にご案内)

本 :『skmt 坂本龍一とは誰か』坂本龍一、後藤繁雄(ちくま文庫)

定 員:10 名程度(要予約)

バリスタ(進行):芹澤

内 容:

◇坂本龍一は、何を感じ、どのように時代をとらえ、どこへ行こうとしているのか——。彼の感受性にぶつかるのは何であり、時事性がどのように創作へと彫琢されるのか。インタビューの達人として知られる独特編集者・後藤繁雄とともに、坂本の思考の系統樹をたどり、「時代」に解消されない独創性の秘密にせまる。インタビューにより、思考の軌跡をときあかす「反伝記」の試み。

◇推薦者からの推薦コメント

「憧れを抱く対象について “もっと知りたい” と思うのはごく自然な反応だと思う。今回、ある具体的な対象について掘り下げながら、なにがそう思わせるのか——そう思わせないのか——を丁寧に考えてみたい。それはつまり、憧れとはなにかを問うことを通じて、じぶんとはなにかを知ることにはかならない。坂本龍一に憧れを抱いている推薦者をモデルに、憧れの生成する背景とその効用を包含的に探求してみたい。(セリンジャー)」

